

『技能訓練』 1962年10月（発行元不明）

## 【講演】若年層従業員の職業観と生活意識 その2

矢 口 新

国立教育研究所

本稿は、前号(9月号)に掲載した同氏の「若年層従業員の職業観と生活意識」の続編である。  
前号と併せてお読みになることを希望します。(編集部)

### 青少年の意識の一般的特色

私どもが青年を見ていて感じることは、いまだきの青年は変っているといいますが、いつの時代でも大人は「いまの若いものは」といいます。そういう見方はむしろ大人として反省すべきではないかと考えています。それでは、大人と青年はちがわないのかというと、そうではなく、若いもののちがいというのはあるもので、まず第一に一般的に考えねばならないのは、普通若いものは非常に理論的、抽象的、理想的であると言われます。それはどこからくるかということ、大人と青年との間の経験のあるなしということからきているといえます。青年は経験が浅く、ものを考えるすじ道はだいたい18、9才になると大人と同じように発達してくるので、その考え方はわかるのですが、残念ながらひとつひとつのその理論の中に含まれている概念についての背景というものはまだ乏しいのであります。仕事はむずかしいというけれども、仕事ということも青年がそういったかぎりでの仕事でありまして、仕事というものはむずかしいものだ、と大人がいうのと青年がいうのとでは中味がちがってきます。それは大人と青年が持っている仕事の経験がちがうからです。大人とのちがいは経験の量ばかりではなく、質においても、まだきわめて貧困だということです。

経験のないということが、ものごとを理想的に考え——よく若いといわれるのはそういうことですが——あるいは理論が抽象的であったり、また理論的に走りすぎることが特色となるわけです。経験の有無が理論（考え方）を作りあげていく。大人にはその理解がないと言えます。だから、大人が本当に理解していれば、自分の持っている経験によって相手のいうことを克服できるはずですが、それは、大人が経験プラス理論というものを持っているからです。

青年は理論をもって押してくる。それに対して大人は経験でもって確信はもっているが、それを理論として表現することはできない。青年の身になって考え、それを位置づけてやることができない。そのように説得しようとしなくて、家庭の中における親子の場合ですと、親は権威をふりまわして、最後には、子どものくせにとくる。それが子どもに反発を招いて親子は永久にあいあわずの状態になるわけです。また、お互いにそういうことについて触れあわないという状態に

なります。

話しあう場合に、青年を理解する技術と理論とのかみ合せを、大人がどれだけもっているかということによって、青年を理解することができる。とかく、大人というものは経験の世界に重きをおき、理論を軽く見る傾向があります。こういうことから、いかに現実を正しく持ちあげるかという努力をする上において、理想と現実は一致すべきものだと思いますが、そうでなければ、われわれの人生というのは理想がなくなってしまうでしょう。そういう考え方から、両者を調和させねばなりません。その調和がどういう点にあるかということ、大人は幅広く持っていれば、青年を受け入れて適切に指導することができ、そういうことが青年を理解するには非常に大事ではないかと思えます。



青年は経験に乏しいといいますが、乏しいながらも経験したその乏しい経験はどういう社会から出てきたのかということも考えねばならないと思えます。

現在の青年が通ってきた社会というのは、戦後の15年間の社会の中において、理論と実現において、それ以前とは異なった構造をもったものができている社会だといえましょう。この社会は、民主主義がモットーになった時代です。民主主義というのは戦後になってはじめてでてきたものではないのですが、しかし、その比重がそれ以前とはちがっています。それは大へんな比重をもったものです。しかし、また一方でそれは理論として生みだされてきたもので、現実がそうなったということではありません。現実はずし民主主義になったわけではなく、そういう点で青年は学校で民主主義の理論を教えられるということは、大へんな圧力を持って青年に与えられた。しかし、日常はそうではなく、もし青年が現実その理論をあてはめるとすると現実はまだまだ矛盾だらけです。大人と子どもの関係、夫と妻の関係、先生と生徒の関係など、いずれも本当に民主的なあり方はどうなのかという現実的なものが存在しているわけではないのです。その辺はどちらかというともまだ非民主的です。そういう条件の下で、青年たちは学校において、民主主義の理論を教わる。これは具体的な現実が乏しいのですから本当はまだよくわからないといってよいのです。

それにもかかわらず、青年の持っている民主主義の理論というものは大人を圧倒するような理論です。ある意味では経験がないから強く、威勢よくいえるのです。その点が大人にはとてもついていけないところです。大人は過去の情報に従って生活をして、理論といってもだいたいこのところ、どちらかといえば現実に流されています。鋭い理論に対抗できるほど現実をよくみて、現実の問題点を究明している人は少ないのです。この点をよく考えてみる必要があります。こうして大人が青年を指導できるほどに民主主義について勉強していないということになります。だから大人は、「そう若いもの言うように、現実民主的に行かないんだ、お前たちは若いのだ、」などとわけのわからぬ発言をします。しかし、これは大人も民主主義を研究する気持をもてばすぐに解消することです。

ところで、こういう青年が職場にはいってくると同時に、この理論と現実との比率が逆になって青年にむかってくるのです。青年は理論の点では自信を持っているのですが、経験の面では自信がなく、むしろ劣等感を抱きます。ここで青年の一般的な心理としていわれている、いわゆる

動揺がおこってきます。経験のないことがいろいろな悩みの中に青年をおとし入れることになるのです。こういう点が、たとえば集団として行動すると、青年のいまの特色が極端にあらわれるわけです。

経験のある大人と話をしていると、自分は経験のないことをすなおに認めて、大人の言うことを受け入れようとする態度を持っているのです。ところが集団として集まると、それらをすっかり忘れて自信の面だけが出てくる。そうすると自分たちだけが天下の英雄であるような行動というものに、いっさいを忘れて突入するわけです。青年の極端から極端への行動というものが、特に集団意識を通じて群集心理を通じて出てくるわけです。大人は群集の中に入ってもそれほど極端にはなりません。青年の極端性というものは経験のない世界で理論的なものをつくりあげているということがいえる。抽象的な世界の中に住んでいる。そこから出てくる行動というものが、大人から見れば青年のとっぴな行動というようにうつるわけです。群集になると、いっそうそのとっぴな面が強くなってきます。そういう点が、大人にとって青年というものがわからないと感じさせる理由です。

しかし現在は、企業の中では全体として昔流のものの考え方で、青年をどう遇するかを知らない人が多く、そのために大人が青年を受け入れることができないであわてている。そのために青年が企業を離れて民青同のような世界で行動をとるということがあるのではないか。そういうことが現在の企業体の中で問題になっていると思います。

### 道徳教育の根本問題

私は昨年秋、ある大学の後期の講義の依頼を受け教壇に立ったのですが、とくに一つ顕著な経験をしました。その大学は郊外にある国立の大学ですが、古い陸軍の建物の跡を使用しています。私は、はじめ講義のために教室にはいったのですが、机は六尺机、椅子も六尺、大へんそまつなものです。ところが、その六尺の机の袖の中にはいっぱい紙屑がつまっているのです。その机の上を手でふれてみるとざらっと音がする。黒板にはチョークの粉がたまっている。床には煙草の吸いがらが散乱している。そういうところで講義をはじめるといことは、私にとってはやりきれないことです。よく汽車の中がきたないといわれますが、あれと同じような状況のところ、学生は、先生はなにを話すんだろうという顔をしている。その学生の中からは将来、小学や中学の先生が出るわけですが、そういう人たちが先生になり、生徒に清潔とか整頓とかを教えるとしたら、これは笑い話になると私は感じました。

そういうことを学生に言うと、学生は不服そうに口をとがらすのですが、公共の場所、ここでは教室ですが、そこで個人個人が他人に不快の念を起させないようにふるまうということは、民主主義の第一歩だと思うのですが、そんな簡単なことでも学生はできるようになっていないのです。そうして、そのきたないのを掃除しようとしません。そのくせ学内には「民主主義の理念をモットーにして……」なんていう立派な張り紙があり、大きな天下国家を論じている。そこには、いまの青年が持っている、あるいは学校の中で十数年育てられてきたものが持っているところの、非常にちぐはぐな生活の形というものが見られるのです。

そのことは学校においてもやはり同じでありまして、机の中に紙屑がはいっているのを見受けることがあります。高校では、席が決っているというよりは、どこに席をとってもいいというようになっているところが多いわけですが、そうすると、やはり机の中は紙屑の置き場になります。それを高校の生活指導をやかましくおっしゃる先生も、必ずしも私のように神経質にはおなりにならない。それでいて、なかなかむずかしいことを教えているわけです。高校では社会科の中に倫理というのがありますが、そこでは近代精神の発達から近代的な思想はなんであるかということについてやるわけです。その中には、もちろん社会における個人の行動の責任などということがはいっています。しかし、そのことは生活の実態においては必ずしも実現されていない。また、学校の先生にしても、必ずしも個人のそういった行動の仕方については教育していない状況にあります。

これは、ほんの一例ですが、近代的な生活の原理となっているものについて、ありとあらゆる点でそういう矛盾を見るのです。現実の生活がどうあったら正しいあり方なのかということは、いまの学校ではそれほど強く必要だとは考えられていないのです。これは日本人の教育についての考え方もかもしれません。観念的なものが先走りするというのです。しかし、これは、こと道德に関しては困るのです。



理論と経験ということを申しあげましたが、これを教育のことばとして言えば、道德的意識と道德的行動（行為）とに分けて考えることができると思いますが、日本における道德ということに関する教育の内容については、どちらに力が入れているかということ、いわゆる意識の側に力が入れているわけです。しかし、本当は両者を合せて、いわば本当に道德的であるという人間ができてくるのであります。その意識と行為の間には必ずしも共通するものがないというのが日本の教育だということは、すでに百年来の日本の教育の問題であります。日本の道德教育が当面している問題というのは、大きくいえばそこにあると言っていると思います。

現在、学校では道德教育をどのように行なっているか、いま申しましたのは概観であります。現在、学校でやっている事態が生れるのには、多少歴史的な経過を説明しなければわからないと思います。戦前は修身という教科があったわけですが、戦後、アメリカの占領時代、修身、地理、歴史の3つを合せて社会という教材が出てきたわけです。これは新しく **Social-Stady** としてアメリカで1930年以後発達してきた教科です。アメリカでも実際には社会科は半分ぐらいで、州によってもちがいますが、いまでも地理、歴史、道德としてやっているところもあります。日本ではそれが統合されたものとして社会科一本になりました。この社会科は、日本ではアメリカとちがって独自に発達しまして、小学、中学、高校、それぞれ日本的な発達をして現在にいたったわけです。

ところが、昭和25、6年ごろから、こういう形の教育に対して一つの大きな反省が生れてきました。いわゆる道德の教育、修身の復活など新聞紙上をさわがせていますが、道德というものの時間がないということは考えさせられる問題ではいかといわれてきました。それに対してさまざまな論戦が行なわれてきましたが、道德という時間を設けて教育をしようということになってきたわけです。

さて、どうしてこういう経過をたどったかと申しますと、これはなかなかむずかしいことがあります。まず、戦後になって修身という教科がなくなった。それは道徳が教育で行なわれなくなったことなのかどうか、というところではなかった。少くとも考え方はそうではなかった。道徳というものは、あらゆる子供の生活の場で、あらゆる教科の中で、しつけとして行なわれていかなければならないと考え、またやってきたわけです。行為の仕方をことばで教えても、それは意識としてはわかって、事実その行為ができるようになるかどうかという点から見ると、必ずしも意識をもっていても、行為としてはできないということが言えると思います。だから、あらゆる生活の場で、たとえば、みんながなかよく生活するということは、なかよくしましよう意識を教育するよりは実際の現実のところ、そういう行為をやらせるというところにおいて成立させる教育という考え方もあるわけです。そういう考え方に立つ人は、いわゆる道徳教育というものについて道徳教育そのものに反対するものではない。時間を設けてそこで意識を教育することによって、ほかの生活の面で、そういう行為を育てていくことが忘れられるなら、かえってマイナスになるのではないかという考え方が非常に強いわけです。

道徳教育というのは、けっして意識だけを問題にしていない、行為というものも問題にして教育をするけれども、それを補充深化するのだというのでありますが、これは理くつの上のことです。しかし、考えてみると問題は道徳の一時間を設けるかどうかということではなく、現実には生活の場でしつけをすることが行なわれているかどうかということです。その例として、私はごく簡単な例を申し上げたのですが、あの程度のことすら実際には行なわれていない。

意識を高めるために道徳の説教をするのもよいでしょう。しかし、それと同時に生活の中のしつけも行なわねばなりません。ところが、その点が日本の教育は盲点になっているのです。学校ばかりではありません。家庭でもその点は盲点です。すでに前にも申しました通り、特に民主的な家庭生活のあり方で正しいしつけが子供に与えられているかということ、これはなほだお寒い状態です。そういう状態で、どうして職場でも正しい行為のできる人間が出てきましょう。こういうことは家庭で考えてみるとわかります。しつけのよくできている子どもは、その家庭そのものがよい伝統的な生活の仕方をもっているところから生れてくるのです。それは、長い間かかって一つ一つつくられてきたものです。こういう場合はこういうふうに行動するのが合理的だし、人間的だというように風雪にさらされて成り立ってきたものです。そういうものの中で子どもも育てられるのです。日本の家庭は残念ながらそういう点で民主的な生活の仕方の伝統をまだもっていません。

しかし、これは学校も職場も同じです。そこにいちばん大きい問題があるのです。つまり道徳の教育というのは、基本的には一つの習慣というものをつくりあげることです。あるいは人間に即していうならば、性格という方向のものが道徳ということなのだと思えます。習慣をつくる、あるいはものの考え方の態度性格をつくるのが、道徳においてはもっとも重要なことだということが忘れられてはならないことだと思えます。それはその人間集団のもっている生活の仕方が基礎になるのです。そして、その生活の仕方が理くつでわかるということではなくて、行為を通じて習慣としてあくまでよいことをするという意識を育てなくてはならない、悪いことはすべきでないという性格の人間をつくらなくてはならない。そういう習性ができなくてはならない。意

識もただ単にいいことだということではなくて、それが習性としてつくりあげられていくというところに道德の大切なところがあります。

道德は、単なるほかの教育における理解や知識というものとはちがうのです。社会と個人との人間関係においてつくりあげられた、一定の緊張関係の習慣化されたものです。ある社会がその社会の道德をもつということは、個人の集りとしてある社会が、ある一定の社会としての構造をもっていて、その形は個人にただ理解されるだけではなくて、同時に個人はどのように行動しなければならないかを社会の構造が指示しているということです。しかも一方、社会の個人に対する強制だということだけでなく、個人の自主性において行なわれなくてはならない。そこに個人個人の創造性が必要です。古いきまった形を守るなどということでないのです。そのときにはじめて道德といえると思います。道德的な行為の中にはよろこんで、当然のこととしてそれができる、という状態においてはじめて道德ということができるといえるでしょう。

それは行為においても意識においても同じであります。個人と社会との関係が同じ強さで引きあっている状態のときに、社会がもっとも妥当な形で道德というものをもっているといえます。社会と個人との、どちらか片方が強ければ考え行動しなくてはならぬ。戦後は社会と個人の緊張関係が崩れていましたが、この関係のバランスがとれているときに道德教育もよく行なわれるときです。それはつまり、社会の生活が全体として正しいあり方、人間のあり方に向って進んでいるということです。そうすると、これは単に子どもにお説教する問題でなく、大人と子どもが一緒になって正しい合理的な民主的な生活をつくりあげる運動をする。そういう生活の営みをするということでしょう。そしてそれは職場においてもそうであります。それがなければ職場の規律などというものも個人を圧迫するものとなり、本当に力が出るもの、人間が生き生きと働いて生活の能率をあげる場とならないでしょう。

道德というのは高い状態においても、低い状態においても社会と個人の間のバランスがとれていることだともいえます。高い段階でバランスがとられれば、それだけその集団のエネルギーは強いということになります。



日本で道德教育というと、これは昔から修身というもので意識を規定するというをやってきた伝統があります。これはいまから一世紀前、日本の近代化がはじまったときからの伝統ですが、それはその時代に、前の封建の世の中の道德はかわって新しい近代的なものを入れなければならなかった。すっかり改めたわけではないですが、やはり近代的にしようという方向はあった。それはどうしても上からというか、観念的というか、ちょうど現在われわれが民主主義をまず理くつとして輸入しているのと同じようにやったわけです。それが学校の修身です。そういう道德教育といえば修身、というやり方が私どもの頭はしみついています。そして、そのことから実際の生活の中での道德性の育て方などというものは、どうも人々の頭に稀薄です。家庭も社会もそういうことは無関心です。そこに習慣、習性という点からみると欠陥が出てきます。いわば口先だけの人間をつくることになります。国で言ってることとやってることとはちがうではないかということが起こってきます。そこに道德教育のいちばんむずかしいところがあります。そのことについての問題というのが、戦後の道德教育のすべてだといっていいと思います。